

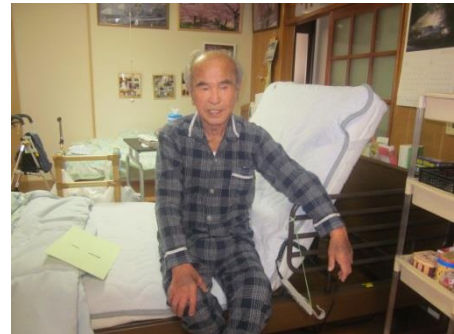
## 戦争体験記 曾我幸雄 2013年93歳の初夏

はじめに 戦争展実行委員会より

この体験記は曾我さんがベットの上で一氣に書かれ手記を戦争展実行委員会まで郵送して下さったものです。手記にお手紙が添えられていました。それには次のようにかかれていました。

**戦争体験者が少なくなった今、安倍政権の再び戦争の道への暴走ぶりをみていると、戦争体験者としてだまっているわけにはいきません。**

**2度と戦争をしてはいけません。**



6月 手記を頂いて訪問をした時

曾我さんは10月に逝去されました。これが最後の証言となりました。

### 入 営

一九四一年九月一日滋賀県にあった中部九十八部隊に入隊する。

当時、兵役は国民の三大義務の一つとして男子は二十歳になると徴兵検査を受けなければならなかった。検査は甲・乙・丙に区分され乙種は第一乙と第二乙があった。甲種は身体に異常がない者で兵役に服務させられた。

侵略戦争が激しくなると、兵役期間の二年間がなしくずし的に三・四年と延長され、二年で退役した者でもすぐ赤紙で再召集された。乙種の者は文句なしに赤紙召集だった。

甲種合格で入隊した私は、最初に週番上等兵から「食事当番集合」の号令がかかったがまだ当番が決まっていなかったので、積極的に当番を買って出て所定の場所へ集合したら、週番上等兵いきなり「集合が遅い」と言って思いきり顔を殴られた。

教育日数を重ねた或る日の点呼の後で、古参の上等兵から編上靴の検査をされると言われ各自編上靴を出した。新兵のうちは忙しくて靴の手入れをする時間がなかった。検査の結果靴に土や埃のついてる者は、その場で靴をなめさせられ、つばを吐くなといわれた。

消灯ラッパが鳴ると一日の行事が終わり、やっと就寝することができた。消灯ラッパの音が「新兵さんは可愛いやナー、また寝て泣くのかよ」と聞こえたり、激務のため、いつも空腹をかかえ、食事ラッパの音が、「いま食った麦飯まだ足らん」と聞こえた。

### 渡 満

激しい教育が終わり、一九四二年二月転属命令が出た。

行き先も告げられず、宮城県の岩沼に集合した。やがて軍用列車で宇品へ到着、そこ



から貨物船に乗船させられ、防寒用の下着が支給され、かねてから行き先は満州でないかと皆でささやき合っていたが、どうやら決まったらしい。軍用船は朝鮮の釜山港へ入港、さらに釜山から軍用列車で北へ向かった。

満州国杏樹に駐在していた第五十三飛行場大隊へ転属になった。

### 墜落機の処理

一九四二年十一月、ハルピンへ落下タンクの装着に行った襲撃機が一機、勃利の山中へ墜落したので救援に行けと命令を受けて、曹長以下三名が救助に向かった。

現場は雪が膝まであり、狐や熊が出る所と聞いていたので、小銃に実弾を携行して行った。

現地へ到着してあまりのひどさに言葉も出なかった。二名の遺体を機外に搬出してみても顔面は粉碎されて人相の区別がつかなかった。雪の深い密林の中であったが、開拓団の山小屋があり、そこで寝食ができ、また機体を処理して運搬まで援助してくれた。

### 鈴木見習士官と溝添准尉

一九四四年の或る日、朝の点呼が終って内務班へ帰った兵士は、班内のベッドの上に全員の背囊や被服が散乱しているのを見て驚いた。新兵教育では、新兵の被服だけ整頓が悪いと言ってよく教官がやるが、古兵までやるのは始めてであった。

兵舎は一室に四十～五十名ほどで寝食を共にしていた。ベッドの上に整頓棚といわれた棚の上へ着替えの被服をたたんで置き、その上に背囊を積んで、ベッドは枕を横一線に並べられ、常に整頓させられていた。

古年兵を含めて被服が散乱しており、怒りが全員に広がっていた。特に新兵は点呼が終るとすぐ食事当番や掃除などで、目の回るような忙しさで、自分の被服の整頓する時間もなかった。

こんなことをやったのは最近士官学校を卒業して赴任してきたばかりの鈴木見習士官が張り切っているところを見せつけるためやったことだと判った。

相手が見習士官とあきらめていた。軍隊では上官の命令は天皇の命令と心得よと絶対服従だった。私はなんとかして皆の怒りを見習士官にぶっつけてやろうと考えたすえ、中隊当番を呼んで、朝食の配膳を差し止めた。将校の三回の食事は中隊当番が食事の担当になっている内務班から食事を受取り、将校室へ持参することになっていた。

しばらくすると中隊当番が来て、将校室から食事の請求があったことを告げたが、私は責任を持つから持って行かなくても良いと言ったので、当番兵は困ったような顔をして戻って行った。すると今度は週番上等兵が来て何とかしてくれと頼みに来た。私は、それで

は飯と味噌汁を将校室の外へ置くように指示すると週番上等兵はしぶしぶ帰って行ったが、指示通りに実行した。

将校室を見ると各自で食事の準備をしているのが見えた。

軍隊では上官に反抗した場合、文句なしに体罰を受けるのは当然となっていたので、何らかの罰は覚悟していたら、夜の点呼後、中隊付きの中尉が顔色を変えて下士官室へ怒鳴りこんできた。彼の説教が終ってしばらくすると、今度は古参の溝添准尉がニコニコ笑いながら入ってきて、「あんまり若い者をいじめるなよ」と言って帰って行った。

こんなことでは済まないだろうと腹を決めていたら、数日後思いがけなく鈴木見習士官と私とで新兵の教育をやれという命令が出た。鈴木見習士官は腹を割って話し合うと案外話しが合う男だった。そこで教育が終ると鈴木見習士官とはそれぞれ別の教育隊へ派遣になり、新兵教育に従事した。

ソ連の参戦によって鈴木見習士官は、自分が教育をしてきた新兵を全部元隊へ復帰させ、自らは兵舎を焼いて手榴弾で自決したということであった。また、溝添准尉は勃利へ転属してソ連軍と激戦の末戦死した。

## ソ連侵攻と平房

一九四五年七月ハルピン郊外の平房へ派遣になり、八月九日表門の衛兵勤務につく。

同日は晴天で、大陸の太陽がキラキラと輝いていた。空気は乾燥してからりとした日だった。平日どおり隊内の石炭運搬をする満人労働者が馬車と共に、兵舎の入口で並んで点呼をうけるのだが、当番に限って隊列が乱れているのを見て不審に思っていると、突然数十発の銃声が聞こえた。同時に満人労働者は馬車と共に蜘蛛の子を散らすように逃げだした。しばらくすると衛兵所の近くにあった航空修理廠の工員宿舎から火の手が上がり、乾燥した空気の中を見る見る燃え広がっていった。情報が全然入らないので、判断に迷っていると、ソ連の参戦が告げられ、全員が緊張した。

部隊内が騒然としている時、衛兵所の前へ三十歳前後の健康そうな男性四、五人「召集令状が来ましたといって、赤紙を持って並んだ。

私はソ連が参戦したので、あわてて召集したのであろうが、部隊にはもう支給する武器がないのに、どうするつもりだろうかと思ったが、命令ならしかがないと思い、表門を通した。

日頃からいづれソ連と戦争になるだろうと思っていたが、意外に早かったのが不安が入り交り複雑な感情になった。

飛行場が心配になったので、衛舎掛に後を頼んで巡察に出かけた。

飛行場には修理中の爆撃機などが係留されていたが、これは兵士が一機ずつ破壊していた。そこから約三百メートルほどの処に「満州七三一部隊」があった。その兵舎の至近距離から日本の砲兵隊が五、六門大砲を向けているので、何をするのかとしばらく眺

めていると、やがて一斉に七三一部隊を砲撃した。証拠隠滅のためだった。

七三一部隊は中国人捕虜、ソ連人などに毒ガスを使用して人体実験を行っていた悪名高い部隊であった。

ハルピンから北へ行くと「安達」という駅がある。ここも七三一部隊の一部で、ここでは中国人の捕虜に防寒服を着せて柱に縛りつけ、小銃で射撃してその威力を試していた。逃げ出した中国人をトラックで轢き殺していた。

私は以前出張のため車で安達を通過したことがあったが、列車が安達の近くになると車内アナウンスで、窓のカーテンを下して外を見ないで下さいと、放送した。

見るなと言われると好奇心から見たくなるものである。そっとカーテンを上げて見ると無人駅で、その向こうには広大な土地が広がり、所々に杭が打っており、全く人影のない不気味な感じの処だった。

すると私の前の席に座っていた二人の将校が「見るなと言ったのに何故見た」と怒鳴られた。幸い民間人が乗っていたので撲られずにすんだ。

この七三一部隊は、ソ連の侵攻と同時に日本へ引き揚げ、アメリカ軍に毒ガスの機密資料を提供して戦犯を逃れている。

衛兵勤務が終った私は、兵舎に帰ると全隊員はタコ壺（一人用の穴）に入り、ソ連の飛行機に対して戦闘準備を終了したが、私たち派遣者に対してタコ壺はなかった。一人になった私は、兵舎で寝ていると夜間になり、ソ連の爆撃機が飛来した。

ハルピンは爆撃の照準になり、到る処で爆音と火柱が上がり、日本軍のサーチライトに照らされた火の中に、ソ連の爆撃機を迎撃するため飛び立った日本戦闘機が一機、力なく映し出されていた。

どうせ爆撃されたらタコ壺に入っているとしても、死ぬのは一緒だと腹を決めていたが、一人で真っ暗な兵舎にいるとさすがに恐怖を覚えた。

## 武装解除

一九四五年八月十五日、日本の敗戦が決まると平房に駐留していた部隊は、私たち派遣者を残したまま日本へ引揚げて行った。派遣になっていた者は原隊へ帰るため平房からハルピンへ向かった。車内は避難する日本人で超満員になり「朝から何も食べていない」とい人が多かった。ハルピン駅のプラットホームには白米が山のように積まれていた。これは避難するために持ってきたが、混雑で持ちきれず、そのまま捨てたものだろう。

ホームには、いつ来るか判らない汽車を待つ人が座り込み、待合室も人で溢れていた。





駅前のいたる所にソ連機の爆撃によって破壊された建物が無惨な光景であった。

ハルピンの東部や北部から引揚げて来た開拓団員も続々と集合し、中にはソ連軍の銃撃で負傷した人もいた。ここでソ連軍と決戦するというデマが流れた。多くの人がごった返している時、突然ソ連の爆撃機が飛来してきた。すると日本軍の中から数十発鋭い銃声が起った。ソ連機は直ちに反転して遠ざかった。そんな混乱の中で原隊を見つけたので復帰することができた。

原隊の兵士の話を聞くと、ソ連が侵攻すると同時に杏樹を出て、チャムスへ向かい、スンガリ河を船でハルピンへ向かう途中、日本の傀儡軍満州軍の攻撃を受けて、船上で戦闘とない、中隊付きの少尉が目を撃たれたと言っていた。また大隊副官は自分の妻を射殺したと言っていた。

私たちは原隊と一緒にハルピン郊外の空き兵舎で宿営したが、この時大隊付の曹長は、前途を悲観して妻子を拳銃で射殺し、自殺した。

間もなく進出してきたソ連軍によって全員武装解除された。

### ソ連兵に略奪される

武装解除された元関東軍はハルピン郊外から、ソ連軍が調達してきた貨物列車に分乗させられた。私は機関車のすぐ後の箱型列車に乗る予定だったが、人員に關係で後方の無蓋車に乗せられた。

八月の中旬を過ぎ、大陸の太陽もようやく西へ傾きかけていた。走行してしばらくすると異状なスピードが出たので、振り落とされないように無蓋車に積み込まれた米俵につかまっていると突然ドスンと大音響と共にショックを受け列車は停止した。

前方をみると米俵につかまっていた曹長の姿が見えないので、車上から下を見ると胴体が轢断されていた。

大陸の永い夏の陽も夕暮れが迫り、人の顔もはっきりと判らないなかで、現場は右往左往の大混乱となり、ソ連の警備兵が乱射した自動小銃の銃声が不気味に響いた。列車が停止した原因は、ソ連軍の侵攻によって鉄道員が逃亡。そのためレールのポイントが切り換えられていなかったということであった。私たちは現場で露營した。その夜、近くの林の中から猛烈な銃声がしたかと思ったら、今度は反対の山中から自動小銃と時々砲声が聞こえたが、しばらくして止んだ。

翌朝、近くの林の中から武装した日本兵が数人、両手を上げて出てきた。敗戦になったことを知らずに抗戦していたらしい。機関車に脱線現場はひどい惨状だった。脱輪した貨車が機関車に乗り上げ、多くの死傷者が出た。

私たちは四人ずつ長い隊列を組んで、牡丹江めざして行進した。

大陸の気候は空気が乾燥しているとはいえ、八月はまだ暑かった。鉄道線路の更新はなおさらであった。これから先どうなるのか判らない不安を覚えながら、持てるだけの食糧を身につけて行進した。この時悲惨だったのは一般邦人だった。中には病弱な乳呑

児をだいて、はだして線路を歩いていたが、乳児が死んだので始末に困り、線路上に置いてきたという悲惨極まりないひともあった。

炎天下の行進で困ったのは飲料水であった。小川の水を飲んだり、それも無くなると今度は沿線の畑に作ってある胡瓜や西瓜に目がつくにだが、どれも綺麗にもぎとって何一つ無かった。ついに馬の足跡に溜まった水を飲み、下痢に悩まされた。

いつの間にか隊列から離れて一人になり、鉄橋を渡りかけて前方の小高い丘を見ると、一人の背の高いソ連戦車兵が拳銃をかまえて立っているのを見て思わず背筋が寒くなった。

武装解除されて戦闘は無くなったと思っていたのでなおさらであった。しかし、ここで簡単に殺されるようなことなら、こちらから鉄橋上におびき寄せて、下の谷へ突き落してやろうと思ったが、もしやり損じたら自分も終りだと思い直して、相手をよく見ると片手で拳銃を構え、もう一方の手を前に出して何かを欲しがると様子で、絶えず周囲を気遣っていた。

この時私は、小さな豚皮の背嚢を腰につけていたので、これではないかと腰から外して、戦車兵に渡すと、彼はすばやくどこかへ消えて行った。

## 牡丹江郊外の惨劇

隊列に参加した私は、重い足を引きずりながら牡丹江外にあった旧日本軍が駐在していた弾薬庫跡へ到着した。

ここまで来てホッとした瞬間、百五六メートルほどの処にあった建物から物凄い大音響と火柱が上がり、煙の間から日本兵が蜘蛛の子を散らすように十数名が逃げてきた。

『熱い、オイ薬を持っていないか、衛生兵はいないか』と必死に叫んで私たちの処へ来た。見ると背中が三分の一ほど火傷している。衛生兵はいても薬を持っている者はいなかった。そこで皆の中で靴につけている油を持っている者がいたので、これを集めて応急処理をしたが、何人かは帰らぬ人となった。

ソ連は日本の捕虜を使って、この弾薬庫を整理し、ここへ收容する目的だったらしい。私たちが早くここへ到着していれば、同じようなことになっていたろう。また、先の列車脱線事故でも、先頭車両に乗車する予定だったが、人員の都合で変更になり、いずれも命拾いした。

## 旧飛行場跡での生活

旧日本軍の飛行場へ移動させられた私たちは、日本へ帰れる日まで待つという希望のない指示で、四、五人ほどの組で、それぞれ穴を掘り、もぐらのような生活を始めた。食糧は各自で持参した米、大豆などで食いつなぎ、ソ連から時々南瓜が支給され、日本へ帰ったらなんとかなるだろう、それまでは頑張ろうと空腹に耐えた。ソ連側からは雑役に狩り出された。こんな生活が続くと、たまらなく故郷が懐かしくなる。然しその反面、

故郷を出発する時、国の為に立派に働いてきます、とって多くの人に送られながら、いまソ連の捕虜になり、みじめな姿で、とりわけ戦死者の家族の手前どうして故郷に帰ることができようかとジレンマに悩まされた。

列車はソ連へ

大陸の空に秋風が吹く頃、捕虜の大移動が始まり貨物列車に乗せられ、行く先も告げられず出発した。牡丹江を出発した列車が東に方向へ走っている間は、もしかするとウラジオオトリから乗船して日本に帰れるのではないかと、はかない希望を持っていた。しかし北へ向って走り続けたため、もうシベリア行きで、伐採作業に従事させられるだろうとあきらめた。

乗車中は給食なし、空腹に耐えかねて列車が停車した時の僅かな時間を見て、ソ連の警備兵が持っていた黒パンと腕時計やバンドなどと交換した。

やがて列車が停車すると、近くの雪のある山から斧と鋸を持った日本兵が三々五々こちらを見ている姿を見て、これは間違いないとみんな溜息まじりであった。

ソ連の警備兵に先導されて到着したのは名も知らぬ土地にあった大きな作業小屋だった。

時刻は夕暮れ時、空腹のため寒さが一段と身にしみた。中には夏服の人もいて寒さに震えていた。

作業小屋の中は真っ暗で、お互いの顔を確認することができなかった。空腹と寒さに震えていると突然、倉庫の隅の方で「南条文夫君です。浪曲をやります。」と言って、よく響く声で浪曲を始めた。この人が復員後、歌手になった三波春夫であった。

## 抑留生活一年目

翌朝、ソ連の警備兵に付き添われてトラックに分乗、どこかの山中の山小屋のような処で下された。バラックを建てるということで、穴掘り作業をさせられた。季節は十二月中旬、シベリアの大地は地下一メートルほども凍っていた。まず焚火をして氷が溶けてからツルハシで穴を掘る作業は、空腹のわれわれには重労働であった。

コムソモリスク地区のホルモリンに移動して、丸太を組立てたログハウスのような宿舎へ移動させられた。炊事当番が決まってからの最初の食事は粟飯だった。副食は何もなし。そのため粟飯が脱穀なしのため、全員が便秘に苦しみ、中には腸の病気で亡くなった者もいた。

広い作業小屋にすし詰めされた私たちは、寒さに耐えきれず暖房設備としてあった、立った一台の薪ストーブの周囲に、われ先に集まった。夜間は電灯なしの暗闇で、明りとりのため白樺の皮を燃やして電灯代わりにした。ソ連の監督が伐採のやり方について講義し、翌朝から伐採に従事させられた。

伐採は二人で大鋸を使って木を切って倒し、一人が斧で枝を切っていく、三人一組でノルマを課せられた。

私たちはソ連の警備兵のすきをみては、焚火で暖をとった。この時に話し合ったのは、故郷の話で、それも食べ物を中心だった。これを見たソ連の警備兵は顔色を変えて怒り、焚火をもみ消した。

零下三十度になるまで野外で働かされたが、寒暖計を持たない私たちには、外気温が判るはずはなかった。鼻が真っ白になり凍傷にかかった私は、馴れない伐採作業のため、膝まであった積雪に足をとられて、倒木の下敷きになるところだった。この倒木で命を落とした者が何人かあった。

零下三十度になると、無風状態になり、直径二十センチほどの縦の木は大きな音を立てて倒木する。シベリアの冬は永い、春と夏が一度に来て五月頃まで雪が残り、十月には井戸に氷が張る。

食事は黒パンといわれる茶色で少し酸味があるパンが一日三百五十グラム、乾燥野菜の入ったスープと共に、夕食時に支給された。朝・昼食はスープのみで重労働に従事させられ、栄養失調で足がふらつくようになった。伐採の最中に「飯あげ！」と言う炊事係の声を聞くのが楽しみだった。ビールの一缶ほどのスープだけでは腹の虫がおさまらず、スープの中に雪を入れて量を増やして満腹感を味わってはいたが、これだけでは味が薄くなるので、誰かが持っていた岩塩を入れて飲んだ。こんな生活が続いたため、顔がむくんできた。

## 抑留生活二年目

この頃になると抑留生活にも少し馴れてきたせいか落ち着いてきた。收容所内に電灯がつき、木製の二段ベッドの部屋に三、四十人程度が收容された。よるになるとベッドの継ぎ目にかくれていた南京虫が出てきて、衣服から露出している手首や首筋をかまれた。除虫剤がないので手でつぶすと異様な臭いがして、ほとんど眠れなかった。

雑草地や林の中へ入って行くと、ブヨの大群に襲われ、顔や手首を刺されて、ひどいかゆみに悩まされた。これを防ぐため、ボロ布に火をつけて蚊取り線香の代用にしたが、効果がないため、やむなく石油を手塗して作業をしたため、皮膚がヒリヒリとして後始末に困った。

シベリアの夏は夜明けが早い。午前三時頃明るくなり、夜は十時頃まで明るい。起床の鐘の音に、重い体を起して重労働に従事すると監督や警備兵の「ダワイ、ダワイ、ブイストラ、ブイストラ」（早くやれ）という怒声が耳を離れなかった。

## 階級章撤廃

この頃になると何処からともなく旧軍隊の階級章を撤廃しようという運動が起き、たちまち全收容所に広がった。この運動を契機にお互いを対等な立場として認め合い、名前の前に同志とつけて呼ぶようになった。

久しぶりの休日だったので、ベッドで寝そべって、いつ帰れるか判らぬ望郷の念を食



べ物の話でごまかしながら時間をつぶしていると、隣の収容所で天皇制について話があるので聞きに行かないかと誘いがあったので、興味半分で出かけた。会場には、学徒動員で召集されたと思われる青年が天皇制について熱っぽく語りかけていた。要旨は次のとおりである。

「今度の戦争は絶対主義的天皇制軍隊が始めた侵略戦争であり、その責任は天皇である。日本は天皇を中心にしてその周りを軍隊が守り、国民を監視するため警察や憲兵がある。そして、これらを財政的に支えたのが大財閥や大地主であった。然しこの侵略戦争に生命がけで反対したのが日本共産党であった」。

この話を聞いた私は、天皇制については入隊以前に「皇朝史略」や「天皇機関説」などを読んでいたので、天皇制について疑問を感じていた。然し軍国主義教育と英雄主義が頭から離れず、軍隊で生死を共にする覚悟で入隊する時に遺言を残していた。

軍隊に入隊してから自分の考えと矛盾するところがあって時々悩んだ。入隊して撲られた時は、自分が古年兵になったら新兵は撲らないと思っていたが、やはり何人かを撲った。

話が終り収容所に帰った私たちは、それぞれ軍隊でやってきた時の反省が語られ始めた。

朝鮮人が入隊してきた時に、天皇崇拝をおしつけ私的制裁を行ったり、満人労働者にひどい仕打ちをしたなどが話し合われた。

## 懲罰房

ある時、こんなことがあった。収容所内の掃除当番としてA君と二人で掃除を終えたところへ、ソ連の女性軍医が土足のまま上がり込み「大変汚い」と言って掃除のやり直しを命じられた。

季節は冬で、水がないため雪を溶かして床の雑巾がけまでしたのに、土足で上がって来るとは非常識だと思ったが口に出せず、命令に従うより他は無かった。

しかし、このまま終わらず、しばらくするとA君と二人、罰として二十四時間懲罰房に入れられた。捕虜になってまた懲罰を受けるとは心の底から怒りが込み上げてきた。

## 民主化運動

天皇制軍隊の話しを境に、各収容所では民主化運動がおきた。軍国主義を礼賛する者や、作業をさぼった者は反動と呼ばれ、皆の前に立たされて批判された。憲兵や警察官をやっていた者は小さくなっていた。

ソ連を強くすることは、日本の民主化を早くすることだとソ連礼賛の主張がなされた。腹の中ではそんな主義主張より、早く帰国させよという要求が強かったが、口に出すことはできなかった。

また、この頃から作業の休日には、演劇をやる余裕もでき、元日活映画の俳優で後年、

女優の岡田嘉子と結婚した谷口新太郎や劇団前進座の俳優坂東春之助などが演劇を上演してみんなの荒んだ心をなごませてくれた。

民主化運動は進んだが、空腹は相変わらずだった。ソ連兵が炊事の時にむいた馬鈴薯の皮を拾って焼いて食べたり、樅の木に寄生している松喰虫のさなぎをビタミン剤の補給だといって焼いて食べたりした。

作業内容も伐採、鉄道の路盤工事、屋根の補修、集団農場の馬鈴薯の選定、鉄道機関車の石炭積みといろいろ変った。

## 労働英雄

抑留生活も三年になると、ソ連人のわれわれに対する態度も少し変わってきた。ある時、ノルマ百パーセント達成したので、少しばかり賃金が支給されたが、使い道がないので紙くず同然に考えていたら、たまたま道路工事に出た時、近くにあった食糧配給所でソ連人宛に食パンの配給をしていたので、思い切って並んでいたソ連人に金を渡して買ってくれと頼んだ。快く承知してくれたので待っていると、しばらくして気の毒そうな顔をして、パンは売り切れたと言って金を返しに来た。

## 入院

抑留生活三年目の夏に、また他の収容所へ移動させられ、レンガ工場で、毎日トロッコでレンガを作る土を運搬する重労働だった。

この頃になって、毎日の重労働のため、足がふらつくようになった。日本の軍医による健康診断が行われ、要入院と診断された。病院と言っても粗末なもので、老年の医師が一人、看護婦が二人ほどで、投薬はなし。食事は相変わらず黒パンとスープだけ。毎日寝るだけの生活が続いたが、労働がないだけ有難かった。

同じ頃、炭鉱で採炭に従事していた仲間の一人が事故で、片足を失くして入院してきた。

彼は「日本帝国主義のために犠牲になった」と言って悔しがった。一週間ほどで退院し、近くの作業隊へ送られた。そこでの作業は襦袢などの洗濯や雑用であったが夜間作業は体にこたえた。

作業隊は抑留される以前は軍楽隊と思われるようなバイオリンやギターなどもあって、作業が終ると愛好者がそれぞれ演奏を楽しんでいた。

## 復員

秋になって抑留者の復員が始まった。ソ連の将校が来て、おぼつかない日本語で復員者の名前を読み上げた。その中に自分の名前が入っていないかと祈るような気持ちで聞いていたが、名前を呼ばれた時は嘘ではないかと自分の耳を疑った。

ナホトカ収容所で煉瓦工場へ終結させられた復員者は、貨物列車に乗せられて、深夜ナ

ホトカへ向けて出発した。一昼夜ほどでナホトカの収容所へ到着。ここで復員船の到着を待つ間、労働歌や、おどりなどで時間を過ごした。また抑留以来始めて三度とも米飯が出た。此処へ来てから二、三日たった或る日、復員者が隊列を組み、収容所へ入ってきた。先頭で指揮をとっていたのは将校で、他の者は日の丸を振って労働歌らしい歌を唄っていたが、その顔は青黒く、元気のない顔をしていた。

これでは旧軍隊の編成そのものではないかと思った私は、早速「日本の軍隊は解体し、軍国主義は無くなったのだ。これからはお互いが自由になった」と言ったような演説を始めた。すると今まで指揮者に従っていた隊列が突然くずれ、指揮者をとり囲み、着ていた服を脱がせようとした。これを見てびっくりした私は、早速止めに入った。

抑圧されていた人が、その原因がわかった時、大きな力を発揮するものだと思った。

一九四八年十一月二十八日午後、ナホトカ港で復員船（貨物船）名優丸に乗船、十二月一日午前、舞鶴港に上陸。夢に見た故国へ帰ることができた。

## 今、思うこと

軍隊生活四年、抑留生活三年三ヶ月、七年三ヶ月の青春は戻ってこないが、抑留期間中に日本の絶対主義的天皇制軍隊の本質や、天皇について学ぶことができたのは、大きな収穫だった。



しかし抑留された関東軍は約五十万人、その中で帰国を夢に見ながら、飢えと寒さでシベリアの凍土で帰らぬ人となった人々が約五万人もいた。

「侵略の定義は、国際的にまだ決まっていない」、「侵略は国によって見方が違う」と言って憲法を改悪しようとして、日本を再び戦争のできる国にしようとしている安倍内閣の悪政を絶対に阻止しなければならない。

二〇一三年（九十三歳の初夏）

## あ と が き

満州事変は俺が始めた。

私の軍隊時代の中隊長で、今は故人になられた人から生前、自分史を送ってもらった。

その中に、こんなことが書いてあった。かつて上官であった関東軍の高級参謀であった石原莞爾氏が、戦後東京裁判が始まって、日本の弁護士が石原氏の処へ来て、満州事変のことを聞きに来たら「満州事変は俺が始めた、俺をA級戦犯にせよ」と言って弁護士を困らせたという。

二〇一三年

曾我幸雄